

透析中止を決意し自宅で終末を迎えた症例を経験して尊厳死を考える

医療法人財団はまゆう会王子病院

山崎吉一 大谷麻岐 尾ノ上直子 河村順子 渡辺千代子

箴島明彦 瀬川賀世子 田中孝夫 市丸喜一郎

【はじめに】

平成 24 年 10 月初旬、数年前から「死にたい」と訴えていた患者が、自己にて透析中断を決意し、自宅で終末を迎えた症例を当施設で初めて経験したので報告する。

【症例と経過】

60 代男性、原疾患慢性糸球体腎炎、透析歴 35 年

数年前より「自分が生かされている意味がわからない、死にたい」などと訴えていた。

10 月初旬、医師へ透析中断を申し出る。その後、事前意思表示を書面で提出。透析を中断し 17 日目自宅で終末を迎えた。

本症例を経験し、尊厳死についてスタッフにアンケートを行った。

尊厳死についてスタッフの意見として、難しい問題・生きる権利も死ぬ権利もある・尊重したいなどがあった。事前意思表示が必要であるとするスタッフが 90%いる事が分かった。

【今後の課題】

今後、患者が同様の決断に至る前に患者の訴えを傾聴する関わりが必要である。患者スタッフ共に事前意思表示に関する理解を深め、患者の終末に関する意思を確認する必要がある。